

pro natura ニュース

南アフリカの旅

中村 岩男（当基金監事・中村税理士事務所所長）

今年6月13日（木）から6月22日（金）まで南アフリカの旅をしました。旅の目的はヴィクトリアの滝とブルートレインと喜望峰遊覧です。

6月13日（水） 成田空港から全日空機で香港へ向かい、香港空港で南アフリカ航空に乗り換えてヨハネスブルグに向かう。同行19名、機中泊。

6月14日（木） 朝7時ヨハネスブルグ着、外は寒いが快晴で楽しい旅の予感がした。国内便でジンバブエのヴィクトリアフォールズ空港へ向かう。目的地近くで機長の計らいで飛行機の両側から滝が見えるよう旋回飛行した。滝の全景が見え水煙が高く昇り、美しい眺めだった。空港の出口で現地の男達が戦いの踊りで迎えてくれアフリカに来たことを実感した。

ホテル到着後オプショナルのヘリコプターツアーに参加した。空からの眺めは素晴らしくヴィクトリアフォールの全景は勿論、沢山の動物の群が見えた。夕刻ザンベジ川のポートクルーズに行く。出航してすぐカバ、ワニ、象、キリンその他沢山の野生の動物に出会い2時間のクルーズの終わりは美しいサンセットに一同感激した。夕食はレストランボマでバーベキュー、肉はバッファロー、ワニ等変わったものがありアフリカンダンスと太鼓のショーで楽しい一夜だった。キンゲダムホテル泊。

6月15日（金） 9時出発。ヴィクトリアの滝観光、デビット・リビングストーンの銅像を見、遊歩道に沿った展望台で角度を変えて巨大な滝を観察した。滝の幅が広いので全景を一望することは不可能、水量が多いので水しぶきが霧雨のように飛び、雨合羽を着ていないとズブ濡れになる。見学後ホテルに戻りバスでボツワナに向かう。出入国の後チョベ国立公園の近くの宿に到着。午後3台のサファリカーに分乗しサファリに出発した。広大な自然保護区は象の保護数が世界一と言われる。象のほかカバ、バッファロー、キリン、



〔筆者撮影〕

ライオンその他沢山の動物に出会い唯々びっくりし、感激した。モアナ・サファリロッジ泊。

6月16日（土） 6時、朝のサファリ・ドライブに出発。気温が低く強烈な寒さ、3時間のドライブで昨日と同じく沢山の動物に出会い早起きの甲斐があった。ロッジに帰り朝食の後はフリータイム、ロッジに隣接するゴルフ場でプレーを楽しむ。同行の男性と2人現地の男性キャディが付き、クラブは借りてボールと手袋は購入。コースは良くないが楽しい一時だった。午後国立公園内を流れるチョベ川へボートサファリーに行く。水辺に棲息する野生動物のうちワニ、カバ、インパラ等多数の動物が見え、夕方200頭以上の象の大群がボートの近くに集まって来たのは壯觀だった。ロッジ連泊。

6月17日（日） 朝食後ロッジ出発、ヴィクトリア・フォールズ空港からヨハネスブルグ空港へ行き南アフリカの首都プレトリアへ到着。市内の開拓記念碑、ユニオンビルを見学する。プレトリア・シェラトンホテル泊。

6月18日（月） 今日は豪華列車ブルートレインの旅です。8時50分プレトリア駅発、速度が緩やかで沿線の景色が刻々と変わり素晴らしい。キンバリー駅で下車、ダイヤモンド博物館、ビッグホールを見学。列車に戻り食事をし部屋に戻り就寝。ブルートレイン車中泊。

6月19日（火） ブドウ畑や農園が広がる中をブルートレインが走りケープタウンが近づいてくると遠くにテーブルマウンテンが見えてきた。快晴ラッキーです。ケープタウン駅到着後バスでワインランド地方へ行きワインの試飲と購入、その後テーブルマウンテンへ行く。ロープウェイで上に登り頂上を散策、海に沈む夕

〔P.8ページに続く〕

平成19年度助成事業報告（見込み）

平成19年度の助成総額（予算）9,000万円

●共同助成事業

I. P.N.ファンド

(財)日本自然保護協会との公募助成
33件 2,680万円

II. ナショナル・トラスト

(社)日本ナショナル・トラスト協会との
公募助成 1件 未定

●自主助成事業

III. 有力保護団体助成

1 (財)日本自然保護協会	2件	400万円
2 (財)世界自然保護基金	3件	400万円
3 NPO法人FoEジャパン	2件	200万円
4 (財)山階鳥類研究所	1件	200万円

IV. 直接助成

(当基金が緊急且つ重要と認める
自然保護に資する各種助成) 8件 1,769万円
未定 1,231万円

*上記I～IVの内容は下記

■助成内容（助成先・テーマ等）（未定分含まず）

助成額

I P.N.ファンド第18期（平成19年度）助成（明細次頁）	2,680万円	
II ナショナル・トラスト活動助成		
① NPO法人 カラカネイトトンボを守る会	・北海道・札幌市の土地（追加取得）	422万円
② 財団法人 阿蘇グリーンストック	・熊本県・阿蘇市の土地取得	交渉中
③ 社団法人 生態系トラスト協会	・高知県高知市の土地取得	交渉中
④ NPO法人 阿蘇花野協会（継続）	・熊本県阿蘇市の土地維持管理費用	50万円
III 有力保護団体助成		
① (財)日本自然保護協会	・普天間飛行場代替施設建設計画問題対処のための沖縄島・内湾自然環境調査 ・「NACS-J河川委員会」による全国の河川問題の整理と河川環境管理のあり方の検討	200万円 200万円
② (財)世界自然保護基金ジャパン	・石垣島白保サンゴ礁における海洋環境モニタリング調査（2007年度） ・ジュゴン・ノグチゲラ・ヤンバルクイナ生息地の調査・保護活動（2007年度） ・カエルツボカビ症の防除に関する広報活動	160万円 160万円 80万円
③ NPO法人 FoEジャパン	・サハリン石油・ガス開発の環境影響における自然環境・野生生物保護のための 調査研究・政策提言・啓蒙活動、他1件（テーマ未定）	200万円
④ (財)山階鳥類研究所	・極東ロシアにおける鳥類標識調査の推進（2年目）	200万円
IV 緊急且つ重要な直接助成		
① 小笠原諸島自然環境保全機構（調査・研究）	・小笠原諸島におけるボランティア活動による外来種対策（1年目）	1,000万円
② カラ・カルスト地域学術調査委員会（略称：コウモリ類学術調査委員会）（調査・研究）	・新石垣空港建設予定地及びその周辺の洞窟群に生息する絶滅危惧種コウモリの生息実態に関する 学術調査2007年（夏期調査）	100万円
③ 三宅島自然研究グループ（調査・研究）	・三宅島の噴火被害地における生態系の保護と復元に向けた生態学的基礎研究（5年継続・5年目）	100万円
④ NPO法人 バードライフ・アジア（活動）	・鳥類保護の国際会議開催	169万円
⑤ 麻布大学・カエルツボカビフォーラム実行委員会（活動）	・カエルツボカビフォーラム2007	100万円
⑥ CBSG Japan（活動）	・CBSG Japan カエルツボカビ対策セミナーの開催と日本の両生類保全のための検討会議	50万円
⑦ 財団法人 日本自然保護協会（活動）	・カエルツボカビ症への緊急対策企画（NACS-J会員に向けた注意喚起と啓発）	150万円
⑧ 麻布大学・爬虫類と両生類の臨床と病理のための研究会とワークショップ実行委員会（活動）	・両生類、無尾類とカエルツボカビ	100万円

2007年度(第18期) プロ・ナトゥーラ・ファンド決定先一覧

■国内研究助成 8件 小計672万円

No.	テ　ー　マ	助成先	代表者	申請額	決定額
1	有明海再生を目指した諫早湾干拓堤防周辺海域の採泥・採水調査(継続)	諫早湾保全生態学研究グループ	佐藤 慎一 (東北大学総合学術博物館 助教授)	76	76
2	北海道根釧台地湿原群保全のための湿原植生と発達史の研究	根釧台地湿原群自然史研究会	百原 新 (千葉大学大学院園芸学研究科 准教授)	110	110
3	超音波レトメリー法を使った琵琶湖の固有種ニゴロブナの生態研究(継続)	琵琶湖漁業を考える会	山根 猛 (近畿大学農学部水産学科 教授)	100	100
4	高山植生の長期モニタリングサイトの設置	山の自然クラブ	下野 綾子 (独立行政法人 国立環境研究所 ポスト クフェロー)	99	99
5	八郎潟干拓地(秋田県大潟村)におけるツツイモノの保全について	秋田自然史研究会 水草グループ	高田 順 (秋田自然史研究会 水草グループ 顧問)	85	77
6	過栄養湖である宮島沼における冬期湛水水田による水質改善の試み	宮島沼の会	藤巻 裕哉 (宮島沼の会 会長)	61	60
7	岐阜県におけるニホンカモシカとニホンジカとの種間関係の解明を目的とする緊急調査	岐阜県ニホンカモシカ研究会	鈴木 正嗣 (岐阜大学 応用生物科学部 獣医学講座 野生動物医学研究室 教授)	104	104
8	大阪地域における蘚苔類・菌類レッドリスト試作のための基礎研究	大阪蘚苔類・菌類レッドリスト研究会	佐久間 大輔 (大阪市立自然史博物館 学芸員)	89	50

■国内活動助成 18件 小計 1,178万円

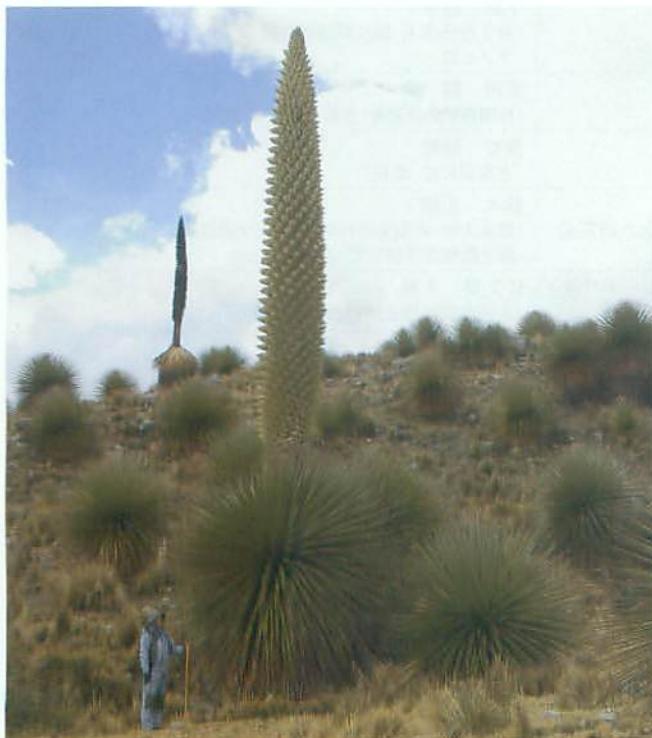
No.	テ　ー　マ	助成先	代表者	申請額	決定額
1	多摩川河口干潟保全のシンポジウム開催	日本野鳥の会神奈川支部	鈴木 茂也 (日本野鳥の会神奈川支部 支部長)	30	30
2	赤城山ヒメギフチョウの保全のための緊急対策(仮)	赤城姫を愛する集まり	坂木 利夫 (法政大学文学部 教授)	60	60
3	市民参加による、ジュゴン生息域の海草藻場のモニタリング調査	シーグラスウォッチ・ジャパン	河内 直子 (シーグラスウォッチ・ジャパン 代表)	105	85
4	ヤクタネゴヨウの調査研究・保護増殖・普及啓発活動	屋久島・ヤクタネゴヨウ調査隊	手塚 賢至 (屋久島・ヤクタネゴヨウ調査隊 代表)	119	90
5	香川県産ニッポンバラタナゴの系統保存のための保護池造成	かがわタナゴ倶楽部	横井 聰 (三菱マテリアル株式会社直島製錬所 顧問)	85	80
6	イトウの保護	道東のイトウを守る会	小林 聰史 (釧路公立大学 教授)	61	55
7	日本産絶滅危惧種のための飼育繁殖個体群管理セミナー	CBSG-Japan	羽山 伸一 (日本獣医生命科学大学 野生動物学教室 准教授)	130	130
8	長野県飯田市のハナノキが生育する湿地におけるモニタリングコースの保全	はなのき友の会	北澤 あさ子 (はなのき友の会 代表)	23	23
9	ツシマヤマネコ交通事故対策チームによる動物交通事故監視活動	ツシマヤマネコ交通事故対策チーム	杉谷 篤志 (NPO法人どうぶつたちの病院 理事長)	52	50
10	中部山岳国立公園立山地区の自然保護に関する利用者の意識調査	富山県地方自治研究センター 環境部会	加藤 輝隆 (富山大学大学院医学薬学研究部(医学) 助教授)	77	55
11	日本語版造礁サンゴ同定マニュアルの作成	沖縄リーフチェック研究会	安部 真理子 (沖縄リーフチェック研究会 会長)	90	70
12	林床植物の生活史研究を基礎とした低地林保護のための環境教育プログラムの開発	子供達に身近な自然の大切さを伝える会	大原 雅 (北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授)	100	85
13	全国の在来タナゴ種の保全技術に関するシンポジウムの開催	NPO法人 日本国際湿地保全連合	辻井 達一 (特活) 日本国際湿地保全連合 会長)	80	70
14	新規外来生物オオタナゴ拡散防止のための啓蒙活動	土浦の自然を守る会	萩原 富司 (土浦の自然を守る会 会計)	67	60
15	国指定天然記念物「犬吠崎の白亜紀浅海堆積物」と銚子海岸の植物生態と植物相に関する啓蒙のためのパンフレットの刊行	「銚子の自然保護を知る会」 パンフレット刊行会	鶴岡 繁 (千葉県生物学会 会員)	97	80
16	堆砂壙と植生保護を組み入れた海岸砂浜保全活動(継続)	NPO法人 表浜ネットワーク、 堆砂壙・植生グループ	市野 和夫 (愛知大学総合郷土研究所 非常勤職員)	40	30
17	-人々のくらしと河口及び沿岸域の自然環境とのかかわりに注目して-吉野川河口の保全にむけて、シンポジウムの開催および報告書の作成	とくしま自然観察の会	井口 利枝子	134	65
18	環境学習としての海藻おしば作りの普及	海藻おしば協会	野田 三千代 (筑波大学下田臨海実験センター 非常勤職員)	100	60

(次ページ下段に続く)

アンデスに生育するブヤ・ライモンディ群落の復元

助成先：Mery Luz Suni（ペルー） 推薦者：増沢武弘（静岡大学教授）

助成金額：120万円（2005年度）



ブヤ・ライモンディの花柱（静岡大学・増沢武弘教授提供）

アンデス山中の標高4000～4500メートルに分布するパイナップル科のブヤ・ライモンディは、極めて成長の遅い植物で、約100年にたった一度だけ数メートルの高さに達する巨大な花を咲かせることで知られています。ただし誰もその正確な寿命はわかっていません。日本でも先ごろ、東京の国立科学博物館でこの花が展示され話題を呼びました。

この稀有な植物はペルーとボリビアの限られた地域にしか分布しておらず、ここ数十年の間に急速に数を減らしています。植物が少ない環境にあるため、家畜の放牧による食害や、燃料や家屋の材料に利用されたためです。いま現地では、研究者によって増殖が図られていますが、技術も資金も乏しいために十分な成果が得られませんでした。

今回P.N.ファンドの助成を得て、静岡大学の増沢教授と現地天野博物館の協力により、この希少種の増殖への道が開けることとなりました。

（☞前ページから続く）

■長期事業助成 2件 小計 310万円

No.	テー マ	助成先	代表者	申請額	決定額
1	絶滅の危機が迫りつつある西中国山地のツキノワグマ孤立個体群保護に資する研究と教育普及事業	広島フィールドミュージアム	金井塙 務 (広島フィールドミュージアム 会長)	221	160
2	兵庫県豊岡市円山川中下流域に生息するコウノトリの採食生態	コウノトリ研究会	武田 広子 (東邦大学大学院 理学研究科生物学専攻 地理生態学研究室 博士後期課程)	200	150

■海外助成 5件 小計 520万円

No.	テー マ	海外申請者	推 薦 者	申請額	決定額
1	ブータンヒマラヤ Gedu-drala 地域の常緑広葉樹雲霧林における人為的インパクトの評価と生物多様性の保全に関する研究	Pema Wangda	北澤 哲弥 (東京都環境局多摩環境事務所 東京都自然保護員)	240	150
2	ネパールにおける住民のハゲワシ保護意識啓発プロジェクト	Bishnu Prasad Shrestha	吉田 修一郎 (独農業食品産業技術総合研究機構主任研究員)	75	70
3	マレーシア・サバ州、クリアス半島のテングザルの保全	Henry Bernard	半谷 吾郎 (京都大学靈長類研究所 准教授)	160	100
4	地域スケールアプローチによる次世代の植物学者養成トレーニング	James V. LaFrankie	伊東 明 (大阪市立大学理学研究科 准教授)	160	100
5	重慶都市域における残存常緑広葉樹林の構造・動態および保全戦略	楊 永川	藤原 道郎 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所 教授)	130	100

プロ・ナトゥーラ・ファンド助成金総額 合計 33件 2,680万円

コンゴ共和国オザラ国立公園北部における 野生生物と人間の共存のための調査研究

助成先：萩原幹子 推薦者：アースウォッチ・ジャパン事務局長 小林俊介
助成金額：205万円（2005年／2006年度）

アフリカのコンゴ共和国の北方にあるオザラ国立公園は、面積13万2千ヘクタールという広大な地域ですが、熱帯雨林や湿地・サヴァンナと変化に富み、ニシローランドゴリラ、マルミミゾウ、ヒョウ、ボンゴなど多くの野生動物の生息地です。反面住民がゾウやゴリラによる農業被害に悩まされています。ここは国立



ゾウから作物を守る防護柵の補修（右が萩原氏）
〔萩原幹子氏提供〕

公園とはいえ、大都市からは遠く、旅行者が簡単に訪れることが出来ません。この未開の地で、日本の女性萩原幹子さんは数年にわたって、住民の暮らしと自然保護の相克という困難な問題に取り組んできました。同国政府国立公園局や現地NGOのバックアップのもと、ゾウの密猟者が跋扈し、道路も整備されていない原生自然環境の公園域を、オートバイで移動するという厳しい状況で活動を続けてきました。P.N.ファンドも彼女の使命感に燃えた立派な国際貢献に対して、2年間助成を行いました。

その結果、農業被害の実態が明らかとなり、またゾウの被害から畑を守る対策のひとつとして、廃油とトウガラシを染み込ませた布を用いた柵を使用して大きな効果をあげ、農民の注目を浴びています。

12月の助成成果発表会では、帰国した萩原さんから直接成果を発表して頂く予定にしています。



第2回ナショナル・トラスト助成先に NPO法人トラストサルン釧路が決定

所在地：北海道釧路市北園町 原野・牧場15.5ヘクタール(湿原)
助成金額：800万円

釧路市の北に広がる湿原は釧路湿原国立公園に指定され、わが国最大の湿原として知られています。ところが釧路市の西部には、国立公園の指定から外れて取り残された広大な湿原があって、その開発が進んでいます。しかしこの地は、わが国唯一のキタサンショウウオ（準絶滅危惧種NT）の生息地であるにもかかわらず、何らの保護対象にもなっていません。最近その中心部に道東自動車道の建設が進み、インターチェンジの設置も予定されています。

長年釧路湿原とその周辺の水源地の保護と、私有地のトラスト化に取り組んでいるトラストサルン釧



釧路湿原のトラスト地 [岡本寛志撮影]

路が、たまたま競売に付された15ヘクタールの土地を、日本ナショナル・トラスト協会と当基金が共同で提供するこの助成制度を利用して、落札取得することができました。

このトラストサルン釧路で20番目のトラスト地の近くには、タンチョウやオジロワシの営巣地があり、トラスト地の一部がインターチェンジ予定地にかかるため、目下道路計画の変更を当局に要望しています。

世界自然遺産登録を目指す小笠原諸島の 外来種対策に取り組むボランティア活動に助成

助成先：小笠原諸島自然環境保全機構（5団体協議体：代表者 堀越和夫）

助成金額：2007年度1000万円、2008年度1000万円、総額2000万円

世界自然遺産を目指す小笠原は今、その登録実現のためにはなんとしても強化し、大いにその成果をあげなければならぬ重要な課題に直面している。それは外来種対策である。そのため現在、環境省、林野庁、東京都などによって様々な外来種対策が事業化され、あるいは計画されている。しかしながら、これら行政の取り組みだけでは手が回らない地域がでたり、また小回りが利かず対策が後手にまわってしまうことも多々ある。たとえばこのような行政による対策の弱点をカバー出来るのが、市民団体、とくに地元に本拠を置く団体のボランティア活動である。

小笠原にある自然保護ないしその関連団体はみな、2、3年前に小笠原の世界自然遺産登録問題が具体的なスケジュールに上ってきた時期よりもはるかに前から、固有種を含んだ生物相や特殊な生態系など小笠原諸島の貴重な自然の保全に取り組んできた。そしていずれもその保全活動の中で、外来種対策にも大きな力を注いでいた。そのため、自然遺産登録に向けての外来種対策において、これらの諸団体に対する関係各方面からの活動要請が大きく、またその活動の成果が大いに期待されている。

このような情勢を踏まえ当基金では、標記のように、小笠原諸島の外来種対策に取り組んでいる諸団体から成る小笠原諸島自然環境保全機構（協議体）に対して、とくにその間の外来種対策の成否が小笠原の世界遺産実現を左右しかねないここ2年間に総額2000万円を助成し、そのボランティア活動をサポートすることにし

た。今回の助成の対象とした外来種対策の計画内容とそれを分担する団体は下記のとおりである。

①モクマオウ等の駆除と駆除材の有効活用

NPO小笠原野生生物研究会

（在父島／代表者：会長 安井隆弥）

小笠原の固有植物で構成されている父島の乾性低木林に侵入しつつある外来樹木の「モクマオウ」と「リュウキュウマツ」を駆除する。駆除は伐採、搬出とその後の萌芽処理によって行い、必要に応じ跡地に在来種の植え込みをする。また、駆除の普及啓発活動の一環として、炭焼きなど駆除材の有効活用を図る。

②外来樹木「アカギ」の駆除と駆除材の有効活用

小笠原母島観光協会

（在母島／代表者：会長 山崎止）

小笠原では、かつて薪炭材として移入された東南アジア原産のアカギが繁茂し、自然環境に大きな影響を及ぼしている。とくに母島において爆発的に増加し、小笠原固有の湿性高木林に侵入して、それにとって代わってアカギ林を形成しつつある。このアカギ駆除は実際には除草剤の樹幹注入、伐採、その後の萌芽処理という過程で行われるが、今回の活動では、駆除の一部を実行するボランティアツアーを内地から招致し、その受け入れの主体となるほか、駆除材の有効活用を図る。

③グリーンアノールの駆除と昆虫の保全

オガサワラシジミの会

（在母島／代表者：会長 植村和彦）

アメリカ東南部・バハマ諸島原産のトカゲであるグリーンアノール（写真）が侵入したことによって、その餌となる小笠原の昆虫類が大きな影響を受け、特に固有のトンボ類やオガサワラシジミ（蝶）、一部の甲虫類などが絶滅に瀕している。今回の活動では、上記の昆虫類がまだ生き残っている母島の重要地点においてグリーンアノールを捕獲駆除するとともに、これらの昆虫類の保全対策を講ずる。捕獲方法はトラップの利用、釣り、手取りによる。なお、このグリーンアノールの駆除においても、小人口の母島では島民ボラン



グリーンアノール [小笠原諸島自然環境保全機構提供]

ティアの大量動員が困難なため、内地からのボランティアを受け入れて実施する。

④ノネコ対策と鳥類の保全

NPO 小笠原自然文化研究所

(在父島／代表者：理事長 堀越和夫)

小笠原ではノネコが海鳥類や絶滅が危惧されるアカガシラカラスバトを捕食しており、緊急な対策が求められている。そのため、まず行政や他のボランティア団体と共同でこれらノネコを捕獲し、内地（東京都獣医師会）に送る。この対症療法的ノネコ対策と併行して、集落や山野に捨てられるネコを先ず減らすという

根元的なノネコ対策のキャンペーン（ワークショップの開催など）を実施する。

⑤外来種問題に関する普及啓発

ボニンインタープリター協会

(在父島／代表者：会長 大好まり)

外来種の影響と対策に関する普及啓発活動を行う。とくに、小中学校の児童生徒を対象とした環境教育イベントを開催し、外来種の影響や外来種対策の意義について教育する。その他、島民や来島者に対し、印刷物、パネル掲示などにより外来種問題について広報活動を実施する。

自主助成案件の紹介

カエルツボカビ対策に集中助成

もし日本の夏の田園風景で、カエルの声が聞かれなくなったら……、考えるだけでも恐ろしいことですが、こんな悪夢が現実に起こりうるという大変な危機が、日本の自然に降りかかろうとしています。

両生類だけに寄生するツボカビが、いま中南米・オーストラリア・ニュージーランド・アフリカ・欧州などで猛威を振るっており、一部の地域ではカエルの90%が絶滅したといわれています。ツボカビはカエルなどの皮膚に寄生し、あるいは寄生しなくても野外で数週間も生きていて、他のカエルに次々に伝播します。したがって一旦野外にはびこると、取り除くことは不可能とされています。

日本では昨年12月、ペットショップなどで、輸入されたカエルのほとんどが、ツボカビに汚染されていることが判明し、これにショックを受けた研究者や自然保护団体などが、共同緊急アピールを出して、ツボカビの発見・予防を呼びかけ、環境省も全国的に実態調査に乗り出しています。なんとかこのツボカビを野外に拡散させないで排除しようというのが当面緊急の方針です。

当基金では事態の深刻さにかんがみ、今年度はツボカビ対策に関する各方面の研究・調査・活動に対して急遽集中的に資金を提供して支援を行うこととしました。また全国的自然保护団体である日本自然保护協会とWWFジャパンに対し、会員が調査に協力するよう呼びかけを要請しました。

いまこうした活動により全国的な実態解明が進捗しています。

●カエルツボカビ対策セミナーの開催と

日本両生類保全のための検討会議

助成先：CBSG ジャパン

助成金額：50万円

●カエルツボカビフォーラム2007年

助成先：麻布大学カエルツボカビフォーラム実行委員会

助成金額：100万円

●カエルツボカビ症への緊急対策企画

(NACS-J会員に向けた注意喚起と啓発)

助成先：(財)日本自然保护協会

助成金額：150万円

●カエルツボカビ症の防除に関する広報活動

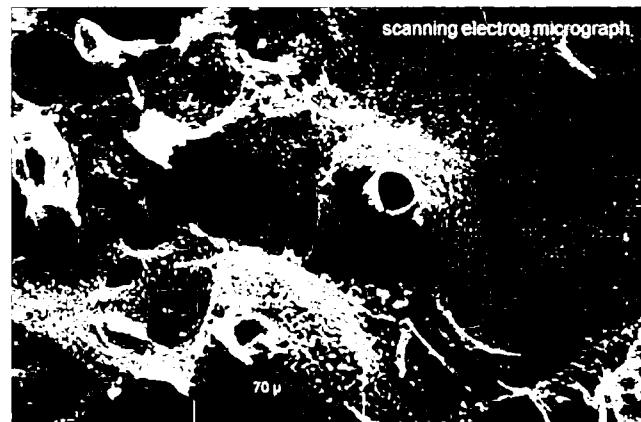
助成先：(財)世界自然保护基金ジャパン

助成金額：80万円

●ワークショップ「両生類一無尾類とカエルツボカビ」

助成先：麻布大学爬虫類と両生類の臨床と病理のための研究会とワークショップ実行委員会

助成金額：100万円



ツボカビの走査型電子顕微鏡像【麻布大学宇根有美准教授提供】

日が美しい。ヴィンヤードホテル泊。

6月20日(水) 8時、バスでアフリカ最西南端を目指して出発、途中遊覧船に乗り換えてアザラシの島ドイガーラ島へ行く。次にペンギンの生育するボルターズビーチに行く。繁殖期で卵を温めている親ペンギン、よたよた歩きのペンギン等沢山いた。午後はケープ半島の突端の喜望峰へ行き、その後1860年に建てた灯台のあるケープポイントへ行きインド洋と大西洋を眺めた。ホテル連泊。

6月21日(木) 朝、宿を出発。今日は帰国の日だ。

11時40分ケープタウン発南アフリカ航空でヨハネスブルグに行き往路と逆ルートで香港に向かった。機中泊。

6月22日(金) 12時15分香港着。全日空機に乗り換えて成田空港に20時15分到着した。

南アフリカは冬の乾期だった。気温が一日のうちに10℃未満から30℃未満と温度差が激しく気温に合わせて衣類の調節が必要だったが毎日快晴に恵まれ快適な旅だった。

平成18年度決算ならびに平成19年度予算

当基金では平成18年5月11日に平成18年度理事・評議員会を開催し、平成18年度の事業報告、決算報告及び平成19年度の事業計画、収支予算案が承認されました。決算と予算は下表の通りです。

平成18年度決算ならびに平成19年度予算

(単位：円)

項目	平成18年度		平成19年度
	予算	決算	予算
(収入の部)			
基本財産運用収入	97,000,000	120,486,629	108,000,000
運用財産運用収入	20,000	101,661	50,000
雑収入	0	142,900	0
事業実施積立預金取崩収入	30,000,000	30,000,000	50,000,000
退職給与積立預金取崩収入	0	350,000	0
前期繰越金	72,075,977	72,075,977	82,864,521
収入合計	199,095,977	223,157,167	240,914,521
(支出の部)			
事業費			
P.N.ファンド公募助成	92,000,000	73,483,695	98,000,000
ナショナル・トラスト活動助成	(26,000,000)	(26,350,000)	(28,000,000)
有力保護団体助成	(21,000,000)	(9,556,000)	(20,000,000)
緊急且重要な直接助成	(12,000,000)	(12,000,000)	(12,000,000)
委託事業	(13,000,000)	(7,910,000)	(30,000,000)
事業管理費	(10,000,000)	(10,000,000)	(0)
管理費等	(10,000,000)	(7,667,695)	(8,000,000)
17,780,000	16,408,951	17,580,000	
特定預金支出	50,400,000	50,400,000	50,400,000
予備費	300,000	0	300,000
次期繰越金	38,615,977	82,864,521	74,634,521
支出合計	199,095,977	223,157,167	240,914,521

職員募集

当財団では主任研究員クラス、1名の増員を早急に計画しております。職種は助成案件のチェック・査定・執行監査、環境問題全般的な情報収集等。条件等は応相談。問い合わせは当基金事務局・多田まで。

編 集 後 記

今年も自然にとって決して良い年ではありませんでした。人間が犯した自然破壊の結果がいろいろとあったと思います。たとえば西表島の貴重な地点にホテルを建設して翠竜を買った開発業者が、東京の繁華街（当基金事務所の近所）に造った天然温泉施設でガス爆発事故を引き起こしました。自然をないがしろにした頼いといえましょう。どうしたらこれらの自然の怒りを鎮めることができるのか、われわれは微力を尽くして参ります。

一つだけ明るいニュースですが、当基金の奥富 清理事長が長年の功績により、今秋の叙勲で瑞宝中綬章を授与されましたのでお知らせ致します。 (岡本和子記)

人 事 異 動

当財団の創立以来長年に亘り監事をされておりました釣宮秀介氏が昨年12月に逝去されました。御冥福をお祈りいたします。

後任として大谷一良氏（元評議員）が監事に選任され就任いたしました。

また、新たに小泉武栄氏（東京学芸大学教授）、古林賢恒氏（NPO法人ライチヨウ保護研究会 副理事長）が評議員に選任されました。

第13回プロ・ナトゥーラ・ファンド 助成成果発表会

●日 時：2007年12月8日(土)
9:55～17:15

●場 所：主婦会館プラザエフ
TEL 03-3265-8111
千代田区六番町15番地

●主 催：(財)自然保護助成基金
(財)日本自然保護協会

●参 加 費：無料（どなたでもお気軽にご参加下さい）

●お申込み：直接会場へお越し下さい。
途中参加も可能です。

●詳細はホームページ
<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~pronat/>
をご参照下さい。

Pro Nature ニュース 第17号

発行者：財団法人 自然保護助成基金
発行日：平成19年11月22日

〒150-0046
東京都渋谷区松濤1-25-8
松濤アネックス2F

TEL：03-5454-1789

FAX：03-5454-2838

E-mail：pro-natura@muj.biglobe.ne.jp
<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~pronat/>